

# 紀州徳川家伝来の琵琶について

Biwa of the Heirloom of Kishu-Tokugawa Family

薦田治子

KOMODA Haruko

はじめに

①調査の対象

②調査の方法

③調査結果

A.大型の雅楽琵琶, B.中型の雅楽琵琶とその構造,

C.平家琵琶の特徴, D.小型の雅楽琵琶, E.特殊な琵琶

おわりに

## 【論文要旨】

本論文は平成21年度に国立歴史民俗博物館で行われた紀州徳川家伝来楽器コレクションの琵琶の調査の報告と、その結果に関する論考である。今回の調査の対象としたのは、同コレクション内の23面の琵琶のうち、中国琵琶を除く日本の琵琶22面である。

調査の第1の目的は、これらの琵琶の楽器としての特徴を考える上での基礎的なデータを観察と計測によって、提供することである。第2の目的は、琵琶のX線撮影や、小型カメラによる槽内調査により、琵琶の構造や製作技術について明らかにすることである。第3の目的は、やはり小型カメラを用いて、槽内に記された墨書を観察することである。琵琶槽内にはしばしば楽器の製作や修理に関する情報が墨書されており、それらは入替や作成が可能な付属文書の情報よりは信憑性が高い。

こうした目的のもとに調査を行った結果以下のようなことが明らかになった。

まず、測定結果から、琵琶を大きさによって大中小の三つのグループに分けることが適当と考えられた。80cm以上90cm未満の中型の琵琶の数が8面に上り、この大きさの琵琶も大型のものと同様よく用いられていた可能性が指摘できた。また、従来、中型の琵琶や80cm未満の小型の琵琶について論じられることは少なかったが、小型の琵琶は数も少なく、用いられ方も特殊で、今後は中型とは別に考えるべきであろう。

次に琵琶の構造については、解体している雲鶴(H-46-103)によって基本的な構造を観察することができ、小型カメラによる槽内観察やX線撮影によって、特殊な構造を持つ琵琶を見出すことができた。

さらに、5柱の接着痕から平家琵琶として使われたことがあきらかな3面の琵琶は、文書類や撥の形から判断して、雅楽琵琶として利用するためにこのコレクションに加えられたと考えられるが、平家琵琶は基本的には雅楽の中型琵琶と違いはなく、その相違は、撥面の月装飾、柱、乗弦といった付属的な部分にあり、十分転用が可能であることが判明した。

そのほか、細部の製作上の工夫や修理の仕方など、多くのことが観察から明らかになった。また平家琵琶のものとされていた撥が、薩摩盲僧琵琶の撥であることが判明し、薩摩琵琶の楽器史の一面があきらかになった。

本調査の計測結果は様々な活用方法があると思う。また、槽内観察やX線撮影の有効性が確認されたことにより、今後の琵琶の楽器調査の方向も示せたと思う。

【キーワード】 雅楽琵琶, 平家琵琶, 槽内銘, 楽器計測, 楽器学